

日本語の中の男と女、そして社会

セリーヌ・パケ

はじめに

言葉は一国の文化や習慣、伝統を反映するものだと思う。日本語は日本の文化を反映している。日本語の男言葉と女言葉は特に、日本の文化や日常生活、社会を反映しているだろう。

私は9年前に、初めて日本に来た時、カルチャー・ショックを受けた。それはその3年前から日本に住んでいた父に会いにくる旅だった。それから日本が大好きになった。カルチャー・ショックといっても、とてもいいショックだった。しかし、その頃、日本語ができなかったし、英語も少ししか話せなかったので、直接日本人とうまくコミュニケーションすることはできなかった。それで、日本という国をもっと知り、また理解するために日本語を勉強しようと思った。日本語を自分のものにすれば日本文化や日本社会をもっと理解する事ができると思った。日本語を勉強していくと男言葉と女言葉という日本語の特異なところに興味を持つようになった。外国人には日本語で正確に自分の考えを述べるのは難しい。特に男言葉と女言葉の使い分けは難しい。

フランス語には男言葉と女言葉のようなものはない。フランス語には女性名詞と男性名詞という文法の性はあるが、日本人と違って、フランスの女性と男性が使う言葉はほとんど同じである。例えば、フランスの小説を読んでいて、その作品を語っている者の性別はまず分からない。いったい、なぜ日本語には女性の話し方と男性の話し方のような違いがあるのだろうか。それは社会、文化や歴史が原因なのだろうか。私にとって日本語の男女言葉の使い分けは日本語を学ぶ困難の一つなので、留学生みんなの為にもこれをレポートのテーマにした。日本人にインタビューすることで、日本語の男言葉と女言葉を考えてみたいと思う。

I. 現代の日本人は話すとき、どんな男言葉／女言葉を使っているか

A. 日本人へのインタビュー

1. 現代、日本人は実際にどんな男言葉と女言葉を使っているかを知るためには日本人に聞くしかないと思った。しかし、インタビューする前に思ったこととインタビューしてから思ったことは全然違っていった。留学生の皆さんと同じように自分の国で日本語を勉強した時、日本語の男言葉と女言葉も勉強したことはある。例えば、日本人は自分のことを表現するとき、男性は「ボク」や「オレ」、女性は「ワタシ」や「アタシ」という人称代名詞

(2)

を使う。それから、男女によって、文章の終わりに付ける助詞の使い分けが違う。例えば、男は「～ゼ」、「～ヨ」や「～ゾ」、女性は「～ネ」や「～ワ」という語尾を使う。それらは男言葉と女言葉の初歩的な違いである。しかし、実際は男言葉と女言葉の世界はもっと複雑である。男言葉の中には女性も使う言葉があるし、逆に女言葉の中にも男性が使う言葉が少ないとはいえ少しはあるからだ。男言葉と女言葉の境はそんなにはっきりしない。

2.

a. 「自分が使っている男言葉／女言葉はどんなものですか」とか「異性の使う言葉のどんな言葉に男らしさ／女らしさを感じるか」というテーマのインタビューをする前は、日本人なら男言葉と女言葉の使い分けははっきり分かるのだろうと思っていたが、実際は違っていた。いろいろな言葉を知るために性別や年齢、仕事が違う日本人にインタビューした。インタビューした人は男性8人、女性6人だ。男性は、一人が20才以下、四人が30才以下、二人が40才以下、一人が50才以下だった。また、女性は一人が20才以下、三人が30才以下、一人が60才以下である。ほとんど皆広島出身であり、大阪出身の人である。皆、「自分が使っている男言葉／女言葉を意識してない」とか、「自分がどんな男言葉／女言葉を使っているか思いつかない」と言うのでびっくりした。皆、日本語の男言葉や女言葉をなにも意識しないで聞いたり、使ったりするようだ。

b. 「日本語の男言葉と女言葉言葉についてどう思いますか」と聞いたら、皆、「いいものだと思う」と答えた。皆、男言葉と女言葉の使い分けが必要だと考えているようである。男性も女性も、誰かと話をしている時、日本語の男言葉と女言葉の使い分けで相手の性格が分かると言う。若い男性も、年輩の男性も、女性が女言葉を使っていれば、女らしさや古風な美しさ、優しさを感じると言った。

c. 「なぜ日本語には男言葉と女言葉があると思うか」という質問には、「昔からそうだから」、「昔の男尊女卑から」、「昔の女性差別から」という様な答えが帰ってきた。

d. 「自分が使っている男言葉／女言葉にはどんなものがあるか」と聞くと、皆、なかなか自分の使っている言葉が思いつかず、具体的な答えは少なかった。それに、どの答えにも広島弁や関西弁が入っていた。

男性は大体、語尾の場合は、

標準語：「～な」、「～だろう」、「～だ」、「～だぜ」

広島弁：「～じゃけん」、「～じゃろう」、「～のー」

命令の場合は、

標準語：「～やれ」、「～止めろ」、「～しろよ」、「～するなよ」

広島弁：「～せ」、「～せや」

人称代名詞の場合は、

「わし」、「おれ」、「おい」、「おまえ」、

普通の言葉では、

「飯をくう」、「腹減った」。

女性は大体、語尾では、

標準語：「～よ」、「～ね」、「～でしょう」、「～わ」

広島弁：「～たいよー」、「～たんよ」

人称代名詞では、

「わたし」「うち」。

e. 「女言葉も使うか」と男性に聞くと、皆、「いいえ、使いません」、「ふつう使いませんが、冗談を言うときだけ使います」、「ふざけてわざと言います」と答えた。女性にも「男言葉も使いますか」と聞くと、皆「使いません」と答えた。

f. 「同性と話す場合と異性と話す場合で、自分が使う男言葉／女言葉は同じか」と聞くと、女性も男性も「一緒です」と答えた。

g. 「話をする相手の年齢と性別が違えばどうか」と聞くと。男対男では、自分よりも若い人の場合と歳が同じ人の場合、自分が使う男言葉はほとんど同じだそう。男対女では、自分よりも若い人と話す場合と歳が同じ人と話す場合、男性が使う男言葉はほとんど同じだが、男同士で話をする時よりも柔らかいそうである。女性は同性と話す場合も、異性と話す場合も、自分よりも若い人であっても、同じ歳の人であっても、女言葉はほとんど同じだそうである。しかし、男性も女性も話す相手が自分よりも歳上の場合、男言葉／女言葉を使わずに丁寧語で話す。また話す相手の親しさによって、自分がつかう男言葉／女言葉も変わるそうである。つまり、歳上の親しい人に丁寧語を使わない事もあるということだ。

h. 「異性の使うどんな言葉が男らしさ／女らしさを感じるか」では、男性は女性が優しく話す時、丁寧語を使う時に女らしさを感じるそうである。

(4)

男性にとって女らしい言葉：「ええー」、人称代名詞：「わたし」、「あたし」、「うち」、語尾：「～です」、「～ですから」、「～でしょう」、「～わ」、「～わよ」、「～わね」、「～ね」、「～よね」、「～じゃない」。

男性は男性が命令形を使う時男らしさを感じるそうである。

男性にとって男らしい言葉：人称代名詞：「わし」、「おい」、「おれ」、語尾：「～な」、「～ぜ」、「～だな」、「～だぜ」、「～だろう」、「～しろよ」、普通の言葉：「おー」、「飯を食う」、「腹減った」、広島弁「～けい」、「～なんじゃけい」、「～じゃ」。

女性は男性が硬い言い方をする時男らしさを感じるそうである。

女性にとって女らしい言葉：人称代名詞：「わたし」、「あたし」、「うち」、語尾：「～かしら」、「～だわ」、「～なのだ」、「～だわ」、「～なの」、「～でしょう」。

女性は「お」を付けるものに女らしさを感じるそうである。

女性にとって男らしい言葉：人称代名詞：「おれ」、「わし」、「ほく」、「おい」、語尾：「～か」、「～だ」、「～じゃないか」、(広島弁)「～ええがのー」、「～してんの?」、「～のー」、「～でー」、命令形：「～しろ」、「こい!」。

男性も女性も女らしさを感じる言葉はほとんど同じようだ。

i. 「普通は女性が使う言葉なのに、男性も使う言葉はないか」には、男性と女性の多くが「ありません」と答えた。女言葉なのに、男性も使う言葉は丁寧語や人に優しくものを頼む時などである：「元気にしているの」、「ドアを閉めて」、「わたし」、「わたくしは」。

j. 「普通、男性が使う言葉なのに、女性も使う言葉はあるか」と聞くと、男性にとっては男言葉なのに、それを女性も使うのは、女性が怒っている時や女性が粗野な言葉遣いをする時だそうである。

例えば：人称代名詞：「お前」、「あんた」、普通の言葉：「うるせー」、「だまれ」、「何やってんだ」、「しっかりしろよ」、「腹減った」、「飯を食う」、「遅いぞ」、「バカヤロウ」。

女性は：人称代名詞：「あんた」、「お前」、語尾：「～だ」、「～だろう」、普通の言葉：「飯を食う」、「腹減った」。

k. 「10年前と比べ、日本人が使う男言葉と女言葉の使い分けは変わったと思うか。また、それはなぜだと思うか」と聞くと、男性は、皆「変わった」と答えた。それから、皆それぞれ答えてくれた：「男性と女性の境界がなくなってきたから」、「日本の社会が変わって、男性と女性の言葉の使い分けが区別しにくくなったから」、「女性が強くなり、男言葉を使うようになったから」、「男女差別がなくなりましたなったから」、「今、女性がどこでも仕事をしていて、段々強くなってきたから」、「ファッションのせい」。女性も「変わった」と答え、男性と同じ様な答え方をした：「昔と違って、女性の

地位が上がってきたから」、「女性は仕事のうえで男性と同じレベルになってきたので自分を主張する様になったから」、「日本も時代が変わってきて、男性も女性も変わってきたから」。

1. 「最近、若い日本人の女性が男言葉を使うようになりましたが、どんな言葉がありますか」と聞くと、

男性は：人称代名詞：「ほく」、「お前」、「あんた」、語尾：「～だよ」、「～だろう」、普通の言葉：「おやじ」、「おっす」、「うるさい」、「馬鹿」、「ほけ」、「腹減った」、「飯を食う」。

女性は：人称代名詞：「あんた」、命令形：「～しろ」、「～せよ（～しね）」、語尾：「～ぜ」、普通の言葉：「うまい（食べ物）」、「腹減った」、「飯を食う」。

男性と女性では、使っている言葉に結構区別があるようだ。日本語の男言葉女言葉の区別は日本の社会にある性の境界を反映しているのだろう。男、女で性が違うように、言葉が違っているのは自然なことだと考えられている。女性は男言葉の一部を使っている、男性は余り女言葉を使わない、あるいは使っている意識していないようだ。インタビューした人たちの中にひとり高校の先生がいた。その先生は自分では意識せずに女言葉や丁寧語を使っていた。それは子供には特に優しく話すようにしているからなのだろう。人それぞれ、性格や生活によって使っている言葉も変わる。男性が使っている男言葉は大体硬い言葉や俗語が多いそうである。女性が男言葉を使う時、男性は場合によってかなり悪いイメージを抱くそうだ。しかし、女性はそれを聞いても彼女に対して「強い人」というイメージを抱くだけらしい。

B. アンケート

1. 性別と年齢

人間が話している言葉は生きていて、人間と同じようにどんどん変わっていく。どこの国の言葉もどんどん変わっていくと思う。現用語はそれを話している人間によってだけではなく、テレビや映画や本を通じて生きていく。日本語も同じだ。日本では漫画を読む人、テレビの映画やドラマを見たりする人がとても多い。そういう漫画やドラマは日本の社会や日本文化を反映するものだ。勿論、日本の漫画やドラマは知的なものばかりではないが、外国人には言葉の修得のための大きな情報の源である。日本の文化や日本人、生きている日本語、日本人が現在使っている言葉を理解する為には漫画やドラマを利用するのが良いようだ。特に若い人達が使っている言葉や流行っている言葉を知る為にはぜひともこのようなものを使う必要がある。現在、日本人が実際に話している言葉は漫画やドラマの中にたくさん出てきているはずだ。日本全体で、日本人がどんな男言葉／女言葉を使っているか知るために漫画やドラマのシナリオの会話を選んだ。私はフランス人で、日本語の男女言葉のニュアンスを感じとりにくいので、漫画やドラマの中から選んだ言葉を日本人に読

(7)

んでもらって、男／女の性を感じるところ、また他にも言葉のスタイルを感じるところをチェックしてもらった。

日本人は一生に自分の年齢や話す年齢によって、自分が話す男女言葉を変える。

	子供	少年	青年	中年	老人
男	女言葉	男言葉／女言葉	ほとんど男言葉	男言葉 両性語	男言葉 お爺さんと おばあさん の言葉
女	女言葉	女言葉	女言葉／男言葉	女言葉 両性語	女言葉 お爺さんと おばあさん の言葉

日本人で子供の頃、ほとんどずっとお母さんと一緒にいれば、女言葉をよく覚えておかしくない。学校に入れば、いろんな子供達と一緒にいるのでどんどんいろんな言葉を覚えるので少しずつ女言葉／男言葉も使うようになるだろう。中学校から高校になると男女言葉の区別もはっきりし、男性は男言葉を使い、女性は女言葉を使うようになる。青年になると男性は男らしくなろうと男言葉を使う。若い女性は勿論、女言葉を使うが、流行とか遊びで男言葉も使うようだ。ある若い女性は乱暴な言葉を言うのが面白いと言う。男性も女性も大人になり、社会にでると段々敬語や丁寧語を使う様になる。男性は会社で「先輩・後輩」の制度の中で男言葉、丁寧語、敬語を使う。

女性も会社で働くようになると、女らしくなり、変な言葉遣いはできないので、女言葉、丁寧語や敬語を使うようになる。男性は歳を取っていくと段々男らしい言葉遣いをとる様だ。方言も使いやすいそうである。老人の言葉は男性も女性も似てきて、男言葉と女言葉と言うよりも方言が多くなるそうである。

2. 男言葉

若い男性、中年の男性が使う男言葉は：

人称代名詞：「おれ」、「ほく」、「おい」、「わし」、「われ」、「おい」、「おまえら」、「おれら」、「あいつら」、「あんた」、「おまえ」、「きみ」、

普通の言葉：「すげー」、「うめー」、「でけー」、「やべー」、「うるせー」、「おい

おい」、「おっさん」、「腹減った」、「飯を食う」

卑語：「てめ」、「馬鹿野郎」、「ぼけ」、

感嘆詞：「よっしゃあ!」、「おっしゃ!」、「こりゃ!」、「おい!」、「ちえっ!」、「よおっ!」、「変な」、

語尾：「～ぜ」、「～ぞ」、「～や」、「～な」、「～わい」、「～か」、「～えぞ（痛えぞ）」、「～かよ」、「～だな」、「～だぜ」、「～だあ」、「～わな」、「～よな」、「～のか」、「～んだ」、「～だよ」、「～だよな」、「～なんじゃ」、「～やのう」、「～だよな」、「～だろう」、「～もんな」、「～もんだ」、「～なんだな」、「～じゃねーよ」、「～だろうがー」、「～じゃねか」、「～じゃねかよ」、「～じゃないのか」、「～だよなあ」、「～じゃねからな」、

否定形の語尾：「～んだよ（動けんだよ）」、「～んぞ（行かんぞ）」、「～えーねえ（勝てえーねえ）」、

命令形の語尾：「～ろよ（～しろよ）」、「～ろーぜ（～しろーぜ）」、

男の人の泣き声：「おいおい」、「うおーん」、「おえっおえっ」、

男の人の笑い方：「わはは」、「わっはは」、「うわっはっは」、「がははは」。

日本人の男の人は自分の職業によって、言葉遣いが違う。普通の会社で働く男の人はかなり丁寧語や敬語それとも女の人に近い言葉を使うようである。学校の先生それとも大学の先生は仕事の影響でかなり優しい言葉を使ったりする。外で働いている人あるいは労働者や農家の方が男言葉や男らしい言葉を使うそうである。

特別な男言葉：

カタギ	:	ヤクザ
	:	
最近は、いい仕事はありません	:	最近は、ええしのぎがあらへんわ
	:	
しかり仕事をしてもうけて下さい	:	しかりしのいだけえー
	:	
計画通りに物事ができた	:	えず通りに事がはこんだ

武士

町人

貴族

おぬし

おまえ

そち

せっしゃ

わたしは

まろは

都会人

田舎者

(8)

知っているよ
知らないよ
はい、はい

知っているべえー (青森)
知らないべえー
うんだ、うんだ

魚釣りに入った時、
大きな魚が釣れたんだよ

魚釣りに行った時、
よおーおおけな魚釣れたでよおー

今年はたくさんお米が
釣れたよ

今年はな、ぎょうさん米が九州
取れたばい。

3. 女言葉

若い女性、中年の女性が使う女言葉には次のようなものがある。若い女性はよく言葉の終わりや語尾をのぼすくせがあるので、ある男女とも使う言葉の語尾をのぼせば、女言葉になる事もある：

人称代名詞：「わたし」、「わたくし」、「あたし」、「うち」、「あたしゃ」、「あなた」、

普通の言葉：「～何てえ」、「～見たいね」、「カッコイイ」、「スゴイイ」、「ヤッダー」、「いやん」、「でもねー」、「そうよね」、「いいのね」

卑語：「くそ」、「馬鹿」、「畜生」、

感嘆詞：「あら!」、「きゃ!」、「まあー」、「あやまあ」、

語尾：「～わ」、「～だわ」、「～わね」、「～わよ」、「～のね」、「～わよね」、「～なの?」、「～のかな?」、「～ないの?」、「～のよ」、「～のね」、「～なのね」、「～なのよ」、「～もんー」、「～だもん」、「～んだって」、「～かしら」、「～のかしら」、「～ですって」、「～ですわ」、「～ちゃった」、「～しちゃう」、「～してちょうだい」、

女性の泣き声：「(う) えーん」、「(う) あーん」、「めそめそ」、

女性の笑い方：「おほほ」、「うふふ」。

女性の方がよく形容詞を使っているそうである。

若い女性の言葉：「超～」、「超ベリーバー」、「超ベリーグー」、「超MM」、「超BM」、「超パー超プー」、「ホワイト キック」、「～て感じ」

上で述べた様に、若い女性は言葉の終わりをのぼす癖があるが、それは男性にとっても女性にとっても、悪い印象を与えるそうである。最近、若い女性、女子高校生や女子中学生は流行りの言葉をよく使うようになった。こういう言葉は日本人にとって、正しくないと感じられるそうである。こういう言葉の中には、英語から来ている言葉もあるそうだが、元の英語の意味とはちょっと違う意味で使っているのだから、外来語とは言えない。これらは

だいたい言葉を短くした略語である。若い女性しか使わないのだから、女言葉なのだろう。

4. 老人言葉の性

老人の男言葉／女言葉は漫画の中にあまり出てこなかったのもそういう言葉を知るために映画を見た。相米慎二の『夏の庭』と吉田喜重の『人間の約束』という映画である。これらの映画の中の老人の会話からいくつかセリフを選んだ。映画には老人が大坂弁を話しているところも出ていた。映画の中の老人の話し方は男性も女性も似ていた。老人が話している言葉には男言葉、女言葉もあるにはあるが、若者や中年と比べ、かなり少ないようだ。老人が使う言葉には方言が多いのだそうである。そういう方言や老人の言葉遣いは「無性」のように感じる。

次のような言葉だ。

人称代名詞：「おら」、「わしら」、「おめえ（おまえ）」

普通の言葉：「～止さないか」、「ちよっくら」、

語尾：「～じゃったかな」、「～みとっただ」、「～だべ」、「～じゃねえや」、「～じゃねえか」、「～じゃねえぞ」、「～なぜえ」、「～ねえだ（～ないだ）」、「～やらねえだ（～ないです）」。

Ⅰ. 日本語の性差はどこから来たか

A. 歴史の中の日本語

1. 昔から男女言葉の差があったか

日本語において女性語と言えれば主として「終助詞」、「人称代名詞」、「敬語」などにみられる女性のみが使う言語表現を差す。男女による言葉の違いは、中世（1086－1573）以前にはほとんど観察されていない。女性語が明確な形で出現したのは室町時代（1338－1573）、女房詞が初めてようである。奈良時代には男女の性による差はなかったそうだ。平安時代から女言葉と違う男言葉の特徴がはっきり出てくる。生活の中では男女とも和語を使用していた。漢語は男のもので女は使うべきではないと考えられていた。漢語は教養語として、男性専用であるかの様に使われていた。鎌倉時代になると女性特有の表現が生まれる。江戸時代には女性達が生活力が旺盛であるのに比例して様々な言葉があった。江戸時代は階層による言葉の違いが歴史上最も激しい時代だったようだ。中世以前から宮廷貴族社会にあっては地位、身分の上下意識を反映して敬語がすでに発生していたが、敬語、ここでは上流婦人の品位を示すものとして女房詞の一部として発達した。昔の日本では漢字を男文字、仮名を女文字といていた事からも分かるように女性は原則的には漢字を使うことはなかった。

2. 武士と侍

(10)

江戸時代には武士と町人の会話はこのようなものであった。

侍A：「たのみましょう」

奉公人：「どうれ」

侍A：「鶴沢松江門でございます。ちょっとお目通りをお願いたく出しますが、ご主人は御在宿であらっしゃいますか。」

奉公人：「へい。こちらへお通り下さいまし。主人へ申し聞けますから。」

侍B：「やれやれ、鶴沢氏！ようこそ... さあ、どうぞすぐに奥へ。」

侍A：「先日はまことにお構い申しませんでどうもはや。その節は別れしてお年玉をありがとうございました。」

侍B：「いえ、いろいろ御馳走にあずかりまして、わたくしこそかえって。こんにちは、ようお早くお出掛けなさいました。」

侍A：「かねてお約束の初めうでございますから御同道で参詣いたしましょう。」

侍B：「どうか御一緒に。わたくしもそれを楽しんでおりましたが、しかしまだ、ちと早うございましょうから、只今つまらんものを申しつけました。ちと一杯やってみましょう。」

侍A：「いえ、それはせっかくのなんですが、帰ってから御馳走になりましょう。まず春の景色を十分に見物するように、なるだけ早くでかけましょうじゃございませんか。」

侍の話し方は丁寧な話し方である。以外と身近な語り口である。

B. 社会生活と日本語

最近まで、日本の社会は男性中心だったので女性差別があった。日本社会には男性は家計を維持するために働き、女性は家にいて、家庭を守らなければならないという意識が根強かった。そのため、日本の社会における女性と男性の役割に合わせて男言葉と女言葉の違いがいままで残されてきたようだ。インタビューについて述べた時触れたように、昔の男尊女卑、女性差別を反映した女らしい言葉遣いと男らしい言葉遣いが日本社会に残っているのだろう。勿論、日本社会が変わるにつれ男女言葉も変わっていく。女性が男の言葉を使うようになり、男性と女性の話す言葉がどんどん似ていく。子供も女性も、昔のように黙っている人はすくなくなり、よく喋るようになってきたようである。

C. 地域差

日本中で男言葉と女言葉が使われているが、地域によってだいぶ違うようだ。方言における男言葉／女言葉の違いも興味深い。これらはずっと昔からあるそうである。例えば、広島弁は結構あくが強いと全国的には考えられているそうである。広島弁の男はよくヤクザ映画に出てきたりするようである。大阪弁の女言葉は東京では男言葉に聞こえるそうである。また、大阪弁の男言葉の「ですわ」の発音が下がったら男言葉に聞こえるが、発音が上がっ

たら女言葉に取られてしまう。また、広島大学の友達の話によると、東京の男性が広島に来て、その友達と話していた時に、「～なの？」とか「ほく」という言葉を使っていたそうだ。その時、その友達にはとても女っぽく聞こえたそうだ。日本の地方では、それぞれ言葉に対しての男らしさや女らしさの価値観が違うようである。

おわりに

この研究を始めた時、日本語の男言葉と女言葉のことについて、日本の社会言語学の専門家が書いたものがほとんどないので、びっくりした。社会言語学という学問はまだ新しいものだから、あまり一般に知られていないようである。そのため、いろんなことを調べるのに苦労した。本に書いてあることを探して読むよりも日本人にインタビューしたり、アンケートしたりする方が私の研究の情報収集に役立った。研究を始める前、日本語に男言葉／女言葉がこんなにいっぱいあるとは思わなかった。このレポートで述べてきたように日本語の男言葉／女言葉の差には様々な原因がある。しかし、日本の歴史、日本の社会、日本の地域性だけが原因とは限らないと思う。日本語の男言葉／女言葉の使い分けはもっと複雑である。日本人の男性、女性は自分の性格、生活、職業、周囲の状況、受けた教育、価値観によって自分の言葉遣いを選んでいる。そのため、女っぽい話し方をする男の人も、男っぽい話し方をする女の人もいる。

日本人ではものを言わないのが大人の条件だそうだ。大人の社会でも、ものを言わないのは美德とされる。言葉は日本人にとって自己満足するためのもの、逆に言えば不満から逃れるためのもの、自分たちを勇気づけるもの、勇気づけるとまでは行かなくても自分たちが何か行動するためのきっかけにするものなのであろうか。日本人が言葉に対して持つ基本姿勢は「言わねば分からぬ」ではないらしい。「言わなくても分かるはず」、「言っても分からぬ」の方が日本人らしい。これはフランスと日本の文化的な大きな違いの一つであると思う。フランス人が言葉に対して持つ基本姿勢は「言わねば分からぬ」である。フランス語には男女言葉はほとんどなく、名詞の男性/女性や主語の性別による形容詞の語尾変化のような文法ぐらいしかない。フランス人の男性の話し方と女性の話し方を比べればだいたい同じだ。昔のフランスには日本みたいに女性差別もあったが、今そんなものはどんどん消えていき、フランス人の男性と女性の話し方は同じになってきているのだ。現在、男性と女性の話し方の違いはイントネーションぐらいである。フランス語の地域による言葉の違いもだんだんなくなっていく。フランス語の中で区別される違いは、若者と中年、そして老人が話す言葉の間にある違いぐらいだ。日本人の若い女の人みたいにフランス人の若者は流行っている言葉を使う。しかし、性別と関係なしにフランス人の若い男の人と女の人ともそういう言葉を使っている。フランス人の中年や老人は大体、そういう言葉を理解する事が出来ない。そういう言葉は正しいフランス語ではないと考えられている。

このように考えてみると、日本語の中で驚くほど多くの「スタイル」が使われているこ

(12)

とはやはり奇妙と思える半面、そもそも人間にとって「言語」がどのようなものであるか
問い直すきっかけを与えてくれる。(了)

【参考文献】

金田一春彦 「日本語百科大事典」

渡辺福美／雄村石昭二 「日本語話題辞典」

水谷修 「話し言葉と日本人」 (1979)

古屋和雄 「心を結ぶ日本語」 (1991)

鈴木考夫著 「言葉と文化」 (1995)

漫画：マガジン、ジャンプ、ヤングジャンプ、スピリッツ、ドラゴンボール、Akira, 花と
夢、X、鈴木由美子の漫画。